

- 9:1 私はキリストにあって真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかししています。
- 9:2 私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。
- 9:3 もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。
- 9:4 彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです。
- 9:5 父祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上であり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。
- 9:6 しかし、神のみことばが無効になったわけではありません。なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、
- 9:7 アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではなく、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」のだからです。
- 9:8 すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです。
- 9:9 約束のみことばはこうです。「私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を産みます。」
- 9:10 このことだけでなく、私たちの父イサクひとりによってみごもったりベカのこともあります。
- 9:11 その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行わないうちに、神の選びの計画の確かさが、行いにはよらず、召してくださる方によるようにと、
- 9:12 「兄は弟に仕える」と彼女に告げられたのです。
- 9:13 「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と書いてあるとおりです。
- 9:14 それでは、どういうことになりますか。神に不正があるのですか。絶対にそんなことはありません。
- 9:15 神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ」と言われました。
- 9:16 したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。
- 9:17 聖書はパロに、「わたしがあなたを立てたのは、あなたにおいてわたしの力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである」と言っています。
- 9:18 こういうわけで、神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。
- 9:19 すると、あなたはこう言うでしょう。「それなのになぜ、神は人を責められるのですか。だれが神のご計画に逆らうことができましょう。」
- 9:20 しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか」と言えるでしょうか。
- 9:21 陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持っていないのでしょうか。
- 9:22 ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。
- 9:23 それも、神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためになのです。
- 9:24 神は、このあわれみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです。
- 9:25 それは、ホセアの手紙でも言うとおられるとおりです。「わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、愛さなかった者を愛する者と呼ぶ。
- 9:26 『あなたがたは、わたしの民ではない』と、わたしが言ったその場所で、彼らは、生ける神の子どもと呼ばれる。」
- 9:27 また、イスラエルについては、イザヤがこう叫んでいます。「たといイスラエルの子どもたちの数は、海べの砂のようであっても、救われるのは、残された者である。

9:28 主は、みことばを完全に、しかも敏速に、地上に成し遂げられる。」
9:29 また、イザヤがこう預言したとおりです。「もし万軍の主が、私たちに子孫を残されなかったら、私たちはソドムのようになり、ゴモラと同じものとされたであろう。」
9:30 では、どういうことになりますか。義を追い求めなかった異邦人は義を得ました。すなわち、信仰による義です。
9:31 しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めながら、その律法に到達しませんでした。
9:32 なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行いによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです。
9:33 それは、こう書かれているとおりです。「見よ。わたしは、シオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

10:1 兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。
10:2 私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。
10:3 というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。
10:4 キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。
10:5 モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いています。
10:6 しかし、信仰による義はこう言います。「あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と言ってはいけません。」それはキリストを引き降ろすことです。
10:7 また、「だれが地の奥底に下るだろうか、と言ってはいけません。」それはキリストを死者の中から引き上げることです。
10:8 では、どう言っていますか。「みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある。」これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです。
10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。
10:10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。
10:11 聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」
10:12 ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。
10:13 「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。
10:14 しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。
10:15 遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」
10:16 しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか」とイザヤは言っています。
10:17 そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。
10:18 でも、こう尋ねましょう。「はたして彼らは聞こえなかったのでしょうか。」むろん、そうではありません。「その声は全地に響き渡り、そのことばは地の果てまで届いた。」
10:19 でも、私はこう言しましょう。「はたしてイスラエルは知らなかったのでしょうか。」まず、モーセがこう言っています。「わたしは、民でない者のことで、あなたがたのねたみを起こさせ、無知な国民のことで、あなたがたを怒らせる。」
10:20 またイザヤは大胆にこう言っています。「わたしは、わたしを求めない者に見いだされ、わたしをたずねない者に自分を現した。」
10:21 またイスラエルについては、こう言っています。「不従順で反抗する民に対して、わたしは一日中、手を差し伸べた。」

はじめに

先週、神の選びの民であるイスラエルに対する神の約束について学びました。その約束は、創世記 12 章に記されたアブラハムへの約束から始まります。

また、当時の慣習に則った方法で神が契約を確立されたこともわかりました。

その方法とは、動物をふたつに裂いて、その間を歩くというものでした。

そうすることで、契約に記された約束をどちらかが破ったなら、破った人をその動物のようにふたつに裂くことができるという意味でした。

通常の契約と神がアブラハムと交わされた契約の大きな違いは、神だけが動物の間を通られたことです。

アブラハムは動物の間を通ることを要求されませんでした。これは、神が契約を守られると信じることがアブラハムに課された責任だという意味です。

こうして、民に関して、また民が住むべき土地について、アブラハムに直接語られた約束の言葉を守る責任が神に課されたのです。

では新約聖書へと学びを進めましょう。ローマ人への手紙の非常に重要な部分、9-11 章を学びます。

その前に、この書の著者と意図について調べる必要があります。

著者：著者は、使徒パウロです。

彼の人生については、使徒の働きを読めばわかります。使徒 13 章以降に記されています。

そこには、異邦人に向けたパウロの働きについて書かれています。

使徒 9 章では、彼がユダヤ教からキリスト教に改宗したいきさつが記されています。また、異邦人に福音を携えるよう召され、派遣されたことも 9 章にあります。

パウロは博学で、聖書のはじめの 5 つの書を熟知していました。

イスラエル屈指の指導者のもとで学んだからです。

ガラテヤ 1 : 13-14

1:13 以前ユダヤ教徒であったころの私の行動は、あなたがたがすでに聞いているところです。私は激しく神の教会を迫害し、これを滅ぼそうとしました。

1:14 また私は、自分と同族で同年輩の多くの者たちに比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり、先祖からの伝承に人一倍熱心でした。

使徒 26 : 4-5

26:4 では申し述べますが、私が最初から私の国民の中で、またエルサレムにおいて過ごした若い時からの生活ぶりは、すべてのユダヤ人の知っているところです。

26:5 彼らは以前から私を知っていますので、証言するつもりならできることですが、私は、私たちの宗教の最も厳格な派に従って、パリサイ人として生活してまいりました。

使徒 22 : 1-3

22:1 「兄弟たち、父たちよ。いま私が皆さんにしようとする弁明を聞いてください。」

22:2 パウロがヘブル語で語りかけるのを聞いて、人々はますます静粛になった。そこでパウロは話し続けた。

22:3 「私はキリキヤのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで私たちの先祖の律法について厳格な教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。

彼は複数の言語を話すことができ、非常に謙虚で献身的な人物でした。

彼は自身をイエス・キリストの「しもべ」と呼びます。（ローマ 1 : 1）

ここで使われた「しもべ」という単語は、自由を選択することもできたが、主人に人生をささげることを選んだ者を指します。（申命記 15 : 1-18）

意図：この手紙が書かれた目的は、手紙自体には明文化されていません。

しかし、パウロの書簡に共通するのは、彼自身が置かれた環境で具体的な状況を思い描いて書かれていることです。ですから、彼の置かれていた状況を調べれば、意図した目的も多少わかるでしょう。

パウロは、ギリシャで3か月滞在したコリントからこの手紙を書いたと思われます。（使徒 20：2）

次の目的地に出航する前にこの手紙を書きました。

次の訪問予定地を3か所挙げています。エルサレム、ローマ、そしてできればスペインです。

（使徒 15：20-28）

この3か所に注目しましょう。

エルサレムはパウロの心にもある場所でした。彼はユダヤ人ですから、その重要性を心得ていました。

また、ユダヤ人信徒の中には彼をいぶかる人もいました。集まった献金をエルサレムの信徒のもとへ届けることで、彼らに対する思いやりや配慮が伝わるでしょう。

ローマはユダヤ人と異邦人が共生する大都市でした。そういうわけでパウロは、過去、現在、未来におけるユダヤ人の霊的状态について手紙の中で説明する必要がありました。

スペインに行こうと考えていたパウロは、異邦人の世界に向けた宣教活動を継続中でした。

ですから、福音をわかりやすく説明する必要があります。

ローマ 9-11 章は、イスラエルの民が福音を拒絶したことが最終的な結末ではないことを、ユダヤ人と異邦人の両者に説明することを意図して書かれたのでしょう。

神はご自身の働きとみことばのすべてにおいて目的と意図をお持ちです。

これは、ローマ 11：25-27 に明確に示されています。

ローマ 11：25-27

11:25 兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、

11:26 こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりです。

「救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬度を取り払う。

11:27 これこそ、彼らに与えたわたしの契約である。それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である。」

これを念頭に、9-11 章における神の目的を探りましょう。

9-10 章を今日の学び、そして2月9日に11章の学びと分けることにしました。

では、ローマ9章から始めましょう。

1. パウロの教えへの導入 (1-5 節)

1 節でパウロは、3つのことを断固として主張します。これは、自身の誠実な思いを明らかにし、聞き手に信用してもらうためです。

パウロは、イエス・キリストにあって真実を語っていると言い、良心が聖霊によって証していると言います。

1-5 節でパウロは自らをイスラエル人と名乗り、同胞たちに対する思いを打ち明けます。

ユダヤ人の兄弟たちを救うことが可能なら何でもすると言います。

そして、神の選民であるユダヤ人の民のアイデンティティに触れ、イエス・キリストとこの選びの民を明確に関連付けます。その中で、6つの重要な事柄を述べました。

- a) 彼らは、神の選びによって神の子とされた。
- b) 神は、神の子とされた人々に栄光を現された。
- c) 神は、神の子とされた人々に契約と約束を与えられた。

- d) 神は、神の子らに律法である十戒を与えられた。
- e) 神は、神に仕える特権を彼らに与えられた。
- f) 人の姿となられた神であるイエス・キリストは、この民をとおして受肉された。

パウロは、イスラエルの民に対する神の約束についての見解を読み手に明確に示そうとしました。

福音のメッセージを説明する手紙の中で、この記述を含むことが重要だとパウロは感じたのです。

私たちは、異邦人として今現在置かれている恵まれた立場を理解する必要があります。

2. イスラエルに関する神のみことばを理解する必要性 (6-13 節)

パウロがまず尋ねたのは次のことです。

神はイスラエルに対する約束を守れなかったのでしょうか。

パウロは明確に「いいえ」と答えます。

そして、イスラエルに関する神のみことばがまだ信頼できる理由を説明します。

パウロは、その理由を説明して証明するために、旧約聖書からふたつの事柄を描写します。

ひとつめは、イスラエル民族の一員として生まれた人と、本物のイスラエル人との違いです。

イスラエルの歴史から、アブラハムは「ハガル」という女奴隷によって息子を授かったことがわかります。

この息子イシュマエルは、アブラハムの妻サラによる約束の家系ではありません。

8 節には、「約束の子どもが子孫とみなされるのです。」とあります。

つまり、神はご自身のみことばに則って約束を果たされます。

神のみことばは、サラから生まれる息子イサクをとおしてイスラエルの民が出ると明確に語っています。

これは神の選びによるものです。神の時を待ちきれなかったアブラハムの過ちの結果は無効とされたのです。

次の描写はもう少しわかりにくいかもしれませんが。

イサクはリベカと結婚し、双子が生まれました。ふたりとも、神の契約で約束されたイサクの子孫です。

けれども、神はヤコブを愛され、エサウを退けられました。

これは理解しがたいかもしれませんが、神は未来の出来事もあらかじめご存知です。また、

私たちがすべてを理解するようにではなく、ご自身の知恵と知識に基づいて選ばれます。

ふたつめの描写からわかるのは、神がご自身の判断に基づいて主権をもって選ばれることです。

私たちは神ではないので、神の決断に異議を唱えることはできません。

神は、ご自身の選びの民族、本物のイスラエルを祝福することを選びました。そして、神はご自身の選ばれたイスラエル人をご存知です。

神の選びの民に対する祝福は継続します。アブラハムの子孫に対する主権者なる神の選びに則って、神の約束は成就するでしょう。

神は主権をもってアブラハムとその子孫を選びました。これについて神が心変わりされたとは、聖書のどこにも記されていません。

一方、彼らが自動的に神に受け入れられるわけではありません。彼らも神を信じる「信仰」、神の御子イエス・キリストの救いを信じる「信仰」が必要です。

彼らが救いを受け入れても、異邦人になるわけではありません。ユダヤ人のままです。

現在の異邦人の多くがここで間違いをします。ユダヤ人がイエスを信じた途端に、異邦人になると思っているのです。

3. 神の義と福音を拒んだイスラエル人 (14-29 節)

この部分は非常に重要です。神のみことばと神の判断に異議を唱える人たちに異議を唱える個所です。

パウロは尋ねます。

神は不公平なのでしょうか。神に不正があるのでしょうか。
パウロはすぐさま、「絶対にそんなことはありません。」と答えます。
そして、出エジプト 33 : 19 を引用します。

出エジプト 33 : 19

33:19 主は仰せられた。「わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、【主】の名で、あなたの前に宣言しよう。わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」

救いは人の願望や努力とは無関係です。ただ、神のあわれみによるものです。

私たちはただ、神のあわれみに頼るのみです。

パウロは、神がエジプトで 10 の災いをとおしてご自身の栄光を現すためにパロの心を頑なになさったことも例に挙げます。

神学博士レオン・モリスは、この個所について次のように語ります。

「まず自ら頑なにならなかった人の心を神が頑なにされたとは、ここにも他の個所にも書かれていない。」

出エジプト記のパロと 10 の災いの話では、パロが最初に心を頑なに閉ざしたことが明らかです。

ですから神は、パロが自らの頑なな心のまま放置される形で頑なにされたのです。

ここで肝心なのは、私たち全員が、自分の罪の罰を神から受けるべき者であるということです。

人が救われていることは奇跡です。

なぜ救われる人もいれば、滅びる人もいるのかは、私たちには決してわかりません。

けれども、神が主権によってユダヤ人を選ばれたことについて、神に異議を唱えることのできる人はいない、ということを理解する必要があります。

パウロは、旧約聖書のみことばを 3 箇所引用し、神が主権をもってユダヤ人も異邦人も選ばれたことを証明します。ただし、大勢のユダヤ人の中から実際に選ばれるのは、「残された者」だけです。

ローマ 9 : 15、17、25-26、

9:15 神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ」と言われました。

9:17 聖書はパロに、「わたしがあなたを立てたのは、あなたにおいてわたしの力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである」と言っています。

9:25 それは、ホセアの書でも言うとおられるとおりです。「わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、愛さなかった者を愛する者と呼ぶ。

9:26 『あなたがたは、わたしの民ではない』と、わたしが言ったその場所で、彼らは、生ける神の子どもと呼ばれる。」

9:27 また、イスラエルについては、イザヤがこう叫んでいます。「たといイスラエルの子どもたちの数は、海べの砂のようであっても、救われるのは、残された者である。

9:28 主は、みことばを完全に、しかも敏速に、地上に成し遂げられる。」

9:29 また、イザヤがこう預言したとおりです。「もし万軍の主が、私たちに子孫を残されなかったら、私たちはソドムのようになり、ゴモラと同じものとされたであろう。」

4. イスラエル国家の現状 (30-33 節)

パウロは、なぜユダヤ人が義を求めたのに救われなかったのかという疑問に向き合います。

また、なぜ、異邦人は神を求めなかったのに救われたのか、という問いにも向き合います。

私たちの考えでは、これはまったく道理にかなわないことです。

問題の核心は 32-33 節にあります。

ローマ 9 : 32-33

9:32 なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行いによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです。

9:33 それは、こう書かれているとおりです。「見よ。わたしは、シオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

義を追い求めたユダヤ人と、そうでなかった異邦人のおもな違いは、「信仰」です。罪深い人間の性質にとって、信仰は常につまずきとなります。

D.M.ロイドジョーンズという有名なウェールズ出身の説教者は、パウロの見解を次のように要約しました。

6-29 節で、パウロはなぜ人が救われるのかを説明しています。それは、主権者なる神の選びによります。しかし、30-33 節でパウロは、なぜ人が滅ぶのかに言及しています。そして、それは自己責任だと説明します。

ケンブリッジのチャールズ・シメオンはおそらく誰よりも安定したメッセージを語る説教者だと言えるでしょう。

彼は、19 世紀前半の人物です。

当時、カルヴァン主義とアルミニウス主義が強く対抗していました。

カルヴァン主義者は、救いはすべて神の責任であると信じ、一方、アルミニウス主義者は救いには人間の責任もあると信じていました。

チャールズ・シメオンは、神学のためにみことばを捨てる危険性に警鐘を鳴らしていました。

「選びについて語る聖書箇所では選びの教理を喜ぶ。一方、使徒たちが悔い改めと従順を促す箇所、および私たちに与えられた選択と行動の自由を示す箇所では、そちら側（人間の責任）に自らを明け渡すのである。」

チャールズ・シメオンは、自らの見解を説明するために、機械を例に挙げました。

機械は、違った方向に向かって動いても、最終的には共通の結果を生み出すものもある、と言いました。

同様に、相反するよう見えるふたつの真理が、実は人の救いを達成するという神の目的をともに果たすのです。

フェイス・ミッション・バイブルカレッジの学長コリン・ペッカム博士は、私の弟子訓練の親役でした。彼は、「私の列車はふたつのレールの上を走る」とよく言っていました。ひとつのレールはカルヴァン主義、もうひとつはアルミニウス主義です。

レールのどちらか片方を取り去ると、列車は脱線して前に進むことができなくなります。

イスラエルに対する神の目的については、神がイスラエルに対して持つておられる目的を私たちは信頼しなくてはなりません。

イスラエルを抜きにするなら、先ほどの例にたとえると、列車は脱線してしまいます。「置換神学」や著名な説教者の見解があっても、神に選ばれた民のために主権者なる神が持つておられる目的は、阻まれません。

では、10 章に進み、今日の学びをまとめましょう。

パウロは 10 章で、なぜ神の選民がイエスと福音を現時点で受け入れていないのかについて説明を試みます。

そして、後ほど 11 章でもその説明をします。

そこでは、神がイスラエルのために長期的な未来を備えておられると説明し、イスラエルの民の不信仰は一時的だと言います。

では、手短かに 10 章を学びましょう。

1. 神の義に関するイスラエルの無知 (1-4 節)

パウロは、ユダヤ人を弁護します。それは、彼らが神の目に正しくあろうと熱心だからです。しかし、彼らは本当の福音を知りませんでした。

ある意味で、ユダヤ人は神をたたえようと頑張っているのですから、ほめられるべきです。少なくとも、彼らは正しく生きる必要性を認識しています。

そのことについては、正しいのです。しかし彼らは、神の御前に義と認められる方法を知りませんでした。

義と認められる唯一の方法は、イエスを信じる信仰によってです。

人が善行による義を達成しようとするのは、世界のどこでもよくあることです。

これは、宗教をとおしてでも、無宗教の人でも、良いことをして自分を義とすることです。天国に行けるだけの善行を積めるよう望むのです。

しかし、どんな宗教や哲学や思想を持っても、聖書が明確に教えているのは、聖書の神が100%聖なる存在だということです。

そんな完璧なきよさの基準に到達できる人は誰もいません。不可能です。

ですから、ユダヤ人も私たちが救いの唯一の希望としてイエス・キリストを信じる信仰を持つ必要があります。

神が民に十戒を与えられた目的は、それに完全に従うことはできないと示すためでした。

神に受け入れられる他の方法が必要です。

残念ながら、大半のユダヤ人は神のご計画を拒絶しました。けれどもそのおかげで、私たち異邦人が、ユダヤ人の救い主を信じる機会に恵まれたわけです。

時が流れて私たち異邦人の時代が終わると、ユダヤ人もイエスを救い主として受け入れ、異邦人が心を頑なに神にさばかれるでしょう。

これについては、このシリーズの最後の説教で黙示録を読むときに詳しくお話します。

2. 義に導く他の方法 (5-13 節)

パウロは5-13節で、心に示され、イエスを信じる信仰を公に告白することが、救いへの唯一の道であると明言します。

イエスを信じる信仰をとおして恵みにより救われるのは、ユダヤ人も異邦人も同じだと、パウロは言います。

アブラハムまでさかのぼっても、神の前に義と認められるのは常に信仰によってでした。

創世記 15 : 1-6

15:1 これらの出来事後、【主】のことばが幻のうちにアブラムに臨み、こう仰せられた。「アブラムよ。恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい。」

15:2 そこでアブラムは申し上げた。「神、主よ。私に何をお与えになるのですか。私には子がありません。私の家の相続人は、あのダマスコのエリエゼルになるのでしょうか。」

15:3 さらに、アブラムは、「ご覧ください。あなたが子孫を私に下さないで、私の家の奴隷が、私の跡取りになるでしょう」と申し上げた。

15:4 すると、【主】のことばが彼に臨み、こう仰せられた。「その者があなたの跡を継いではならない。ただ、あなた自身から生まれ出て来る者が、あなたの跡を継がなければならない。」

15:5 そして、彼を外に連れ出して仰せられた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」

15:6 彼は【主】を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

3. 伝道の必要性 (14-15 節)

パウロは14-15節で、伝道の必要性を指摘します。現在から未来にかけて、イエスのことをユダヤ人に伝える大きなニーズがあります。

私たちはどうでしょう。イエスのことを人に伝えるために、どんなことをしているでしょうか。

4. イスラエルの不信仰の理由 (16-21 節)

16-21節のおもな焦点は、イスラエルの不信仰の理由を説明することです。

パウロは、18-19節でふたつの答えの可能性を排除し、20-21節で説明します。

イスラエルが福音を拒んだ理由として考えられるものでパウロが排除したのは、どんな内容だったでしょう。

まずパウロは、「はたして彼らは聞こえなかったのでしょうか。」と言います。そして、旧約聖書の詩篇 19：4 を引用して、神のみことばは彼らに届いたことを確認します。

次にパウロが排除した理由は、イスラエル人はメッセージを理解しなかったのか、というものです。

聞いても理解できないことはあります。

しかし、彼らが話を聞いて怒ったということは、理解はできたということです。しかし、彼らの心が頑なで、イエスのメッセージを受け入れようとしなかったのです。

さて、パウロは 20-21 節で、イスラエル人がイエスの福音を拒絶した本当の理由を説明します。ここでパウロは、イザヤ書 65：1-2 を引用します。

イザヤ書 65：1-2

65:1 わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ、わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた。わたしは、わたしの名を呼び求めなかった国民に向かって、「わたしはここだ、わたしはここだ」と言った。

65:2 わたしは、反逆の民、自分の思いに従って良くない道を歩む者たちに、一日中、わたしの手を差し伸べた。

パウロの説明によると、神は今の一時、ユダヤ人と異邦人の立場を逆転させておられるのです。

異邦人は現在、救われるチャンスがあります。一方、ユダヤ人の多くは心を閉ざしたままです。

これが現状です。

しかし、この状況は変わります。私はすでに、流れが変化してきていると信じます。

パウロは 11 章で、自身の教えを展開し、将来どのようなことが起こるかを説明します。そして、神がご自身の選びの民を退けられたのでも、異邦人がイスラエルの未来に対する神のご計画を新たに受けるようになったのでもないと説明します。

2月9日に礼拝に来られない人は、その日のメッセージを必ずダウンロードしてください。そこで取り上げる問題の全容を理解するのが肝要だからです。置換神学の信奉者たちは、この問題が理解できないようです。